

研究成果報告書

主研究者	藤原まみ	所属	国際総合科学部
共同研究者	Andrzej Świrkowski (アダム・ミツケヴィッチ大学、ポーランド)		
研究課題名			
感染症と文学の「過去」「現在」そして「未来」——時間の加速と膠着が交錯する場における、群衆・異文化表象研究——			
研究内容と成果の概要			
<p>本研究は文学装置としての感染症は、テキストの新たな読みを開く可能性を有していると仮定し、アダム・ミツケヴィッチ大学（ポーランド）の Andrzej Świrkowski 先生と共同して、感染症の特徴——1. 加速する時間と間延びする時間が共存する。2. 他者性を際立たせるものであると同時に、自己と非自己との境界を曖昧にする——に着目しながら、南洋と日本文学の関係、他者、及び、群衆表象から考察した。</p> <p>研究を進めていく過程において、検討を予定していたジャック・ロンドン(Jack London)、ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)のテキストに加えて、ポーランド作家 Orszula Kochanowska, Jan Kochanowski, Juliusz Słowacki, Bruno Jasiński, Jalu Kurek、芥川龍之介、寺田寅彦のテキストについての検討も行った。</p> <p>1905年に発表された寺田寅彦の「団栗」には、重層化した過去と現在、及び、現在と未来が示されている。さらに、このテキストには、過去を規定する現在、未来を規定する現在の時とは性質を事にする時間軸が、南洋（ジャワ）と関連づけられて示されている。当時のジャワでは、植民地政策の影響のもと、感染症の流行に何度も襲われていた。しかしながら、「団栗」では「ジャワ」を時の感覚を麻痺させる場であり、感染症とは無縁の真空地帯として表象している。「団栗」における「ジャワ」に関する描写は、寅彦の南洋に対する私的幻想が表されていると言えよう。寅彦は実際にジャワに出向いたことがないため、これまでの研究においては、「団栗」は日本文学における南洋小説のカテゴリーに入れられてこなかった。しかし、「団栗」というテキストには、時空間における異質の場としての南洋が、感染症関連の言説と関連づけられて表されている。「団栗」は感染症に関する表象が日本文学と南洋の関係の一端を示しうることを示している。</p> <p>提言：感染症を描く様々な文化圏の文学を考察することを通じて、異なる文化や地域における感染症の認識の違いに対する理解を深めることが可能である。この認識の違いを理解し、異文化への敬意と共感を基にした対話を促進することは、新型コロナウイルスのようなグローバルな課題に取り組む際において重要である。従って、医学部などにおける感染症（公衆衛生）関連講義の一環として、学際的に感染症と文学の関係を考える機会を設け、それを地域に還元していく試みを検討していく必要があるのではないだろうか。</p>			

研究進捗状況・研究成果の公表状況等

論文、学会等発表、実データの利用状況、研究の有用性を広めるための活動など

2022年12月3日：2022年度日本比較文学会秋季九州大会（熊本大学）、シンポジウム発表「ラフカディオ・ハーン作品と感染症」

2023年10月6日：Jack London Society's 16th Biennial Symposium（アメリカ）、パネル発表“Nakata Yoshimatsu and His Cultural Background”

2023年10月29日：国際芥川龍之介学会2023年度大会（上海外国語大学）「芥川龍之介のフランス小説翻訳」個人発表、

以上の成果は出版予定書籍に収録予定

本共同研究の発展として、Andrzej Świrkowski先生、西槇偉先生（熊本大学）、Pujo（Airlangga University, インドネシア）先生等と共に、「「南洋」と日本近現代文学・文化——西洋・東洋・南洋からの眼差しと文化交渉」という課題で、科研費に応募した。

その他特記事項